
瞋恚の炎

幻妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞋恚の炎

【Nコード】

N1864Y

【作者名】

幻妖

【あらすじ】

霧島仁、日常を生きる平凡な青年。彼はとある事件をきっかけに非日常へと足を踏み入れていく……。

「非日常？ いいぜ、んなモン俺がぶち壊してやるよ！！」

日常と非日常（前書き）

初の小説です。読んでください!!

日常と非日常

朝、とある家の一室に軽快な電子音が響く。時刻は7時45分。

「う……………むう……………」

顔をしかめて唸ったのは、部屋の主、霧島仁。きりしまじん
とはいえ、彼が起きる気配はない。何を隠そう、彼、朝には滅法弱い。

そんなこんなで5分ほど過ぎたころ、彼の部屋の扉が音もなく開かれた。

部屋の中に滑り込む、一つの影。それは仁の眠るベッドの傍まで密かに近づくと、垂直に足を振り上げる。

「ちえすとおおおおおおお!!」 「!?!?…ぬおおおおおおお!!」

惚れ惚れするほど見事な踵落としが放たれた。

しかし、仁はその時放たれた殺気を見逃さず、咄嗟に自らベッドから転がり落ちることでそれを回避する。その代わりと言ってはなんだが、思いっきり不吉な音を立てるベッド。

「痛っうううう。……………何しやがる、茜ええ!!」あかね

「殺気は抑えたはずなのに……。何で分かったの?」

そんなことを言っているこの少女は、衣笠茜。きぬがさ 仁の幼馴染である。

「分かるわああああ!!こんなこと毎日毎日やられりゃ、どんな奴でも分かるようになるぞ!!」

どうやら、彼の危機察知能力は、日々の訓練の賜物のようである。

「むう……。新たな方法を考えねばなら「考えんでいい!!」…つまんないの…」

「つまんないって…。あ、もうこんな時間か…。行こうぜ、遅刻しちまう」扉へと向かう仁。

「むう……。」「ついて行く茜。

「あ…：そういえばさあ…」扉を開けて仁が振り返る。

「?どうかした?」

「ああ…：今日は白だったな…：って、ひiiiiiiii!!（ボタン!?!）」

「■■■■■■■■■■!」

言葉にならない叫びと共に、荒々しく閉められた扉を部屋の内から衝撃が襲う。…ちよっと待て。何故、木の扉にひびが入る。

……結局、遅刻はしませんでした。

————

時は過ぎ、昼休み。仁は友人2人と弁当を食べている。

「む?肝試しだと…!?!」仁が言う。

「おう、裏山に寂れたお堂があるだろ？あそこに行く！」詳しく説明する友人A、木島^{きしま}。

「行くよな、な？」催促する友人B、神田^{かんだ}。

「肝試し……。うゝむ、漢^{やん}のロマンを感じる！！行くぞ、お前らああああ！！」

「よおっし！！集合時間は本日午後11時半！！遅れるな！！」

「「オオッス！！」」

…こいつらは馬鹿だ。

——————

「という訳で、今夜は肝試しに行ってくる」高らかに言う仁。場所は衣川家。

「……………」人を殺せそうなほどのジト目で仁を見る茜。

何故、仁が茜にこんなことを報告しているのかというと、実は彼の両親は滅多に家に帰ってこられず、自分たちの息子の監視を茜に一任している。なので、嘘をついたり、黙って遠出したりすると、今日の朝なぞ比較の対象にもならないほどの地獄が彼を襲うのだ。既にその地獄を経験したことがある仁は今回のように、素直に自分の行動を逐一報告している。

「アンタのことだから、多分、何を言っても止めないでしょうけど…」

「分かってるじゃないか（ガスッ!!）……!!」

仁の頭に落ちる拳骨。^{ゲンコ}

「うー。裏山のお堂でしょ？悪いことは言わない。場所を変えなさい」

「あそこだからいいんだよ!!それに俺たちは場所を変えるつもりはない!!じゃな!」

家を飛び出していった仁を見て、茜が呟く。

「あそこは 本物なのに…。あの馬鹿…」
————

時刻は午後11時半。例のお堂付近。

「では、第一回、肝試し大会を実行する!」ひっそりと宣言する木島。

「大会って……俺らしいねえじゃん」

「諦めろ、神田。あんなった木島は止められん」

「なに、ルールは簡単だ。お堂の扉に貼ってあるお札を剥がす。それだけだ」

「…よおっし!俺が行こう!」

「仁!?」「よし、行ってこい、霧島軍曹!」

二人の声を背に歩き出す仁。そして、お堂の前に立った。

「これ…か？ま、いっか」目的のブツと思しきお札を剥がし、二人の元へ戻る。

「おまた「仁、後ろ！！」…！！」

神田の声を聞くと共に、背後から殺気を感じる。

無意識の内に転がると、さっきまで頭のあった位置を刀が通った。

「……………！てめえら、逃げろ！！こいつは俺狙いだ！！」

「う…あ…」「神田、急げ！」「……………くっ！仁、死ぬなよ！」

元来た道を急いで引き返す二人。

それを尻目に仁は自分を襲ったモノと対峙する。

「ふむ…我が剣筋を避けるか…。なかなか骨がありそうだな…」

こうなった元凶である、侍のような格好をしたそれが言葉を発する。それを正面から見据えて仁が言う。

「悪いねえ…。殺気には慣れているもんで…！」

日常と非日常（後書き）

頑張りました！！そしたら一日で書けました！！

これからも頑張って書きますよー！！

感想、お待ちしております。

世界の理と異端者（前書き）

第二話です。『つらつらと…。』には、超不定期更新だとか言っておきながら、ガッツリ更新してしまっています（笑）。では、お楽しみ下さい。

世界の理と異端者

寂れたお堂の前。仁と侍のような格好のそれは向かい合って立っていた。

「辞世の句は…詠めたか？」それが尋ねてくる。

「悪いねえ…。俺、俳句苦手なの…よっ!!」答えるや否や走り出す仁。

「そうか…それは…失敬!!」殺気が放たれる。

それは仁が踏み込みながら正拳突きを放つのを一步横にずれて避け、逆に仁に向けて横薙ぎに刀を振るう。

「ちいっ…………!!」

上体を反らしてこれを避けると、勢いをつけて、頭突きを喰らわせる仁。

その攻撃をもろに喰らい吹っ飛ぶそれ。

「よし!!少しは効いただろ……………んな!?!」

仁が目にしたのは、傷一つないそれ。

「たはー、おにーさん、困っちゃうな……。あれ、結構本気だったんだが……」

「ふむ……………その程度か……。軽い準備運動のつもりだったのだが

…いささか拍子抜けだな。…冥土の土産に少し本気を見せてやろう
…」

そう言った直後、その姿が…………消えた。

「消え…………!?!」

「後ろだ、少年。残念だったな」その言葉が響き、白刃が煌めく。

咄嗟に目をつぶった仁。しかし、刀が彼に届くことはなかった。
彼の耳に届いたのは甲高い金属音。そして何かが吹っ飛ぶ音。

「…………え…………!?!」

仁が目を開けるとそこには予想もしていなかった人物がいた。

「あか…………ね…………!?!」

「全く…………だから言ったのよ。ここには来るなって」

そう、彼の目の前にいたのは、衣笠茜。

「お…お前…………。コスプレ大会にでも出てたの（ゴスツ）…………峰
打ちって…………痛いんだよ、分かってる?」

涙目の仁が言うように、彼女の服装はいつもとは全く異なっていた。
端的に言おう。巫女服だった。ただ、巫女さんと決定的に違うのは、
彼女の手握られている日本刀。

「話は後よ。まずはあいつを滅するわ」

「滅する？あいつ、人間じゃないのか！？」驚く仁。

「当たり前でしょ。あれは落ち武者。ってか、なんだと思ってたの？」

「…………住処を荒らされ、怒りのあまり偶然持っていた刀を振り回し始めたホームレス…かな？」

「あらあら、随分と限定された人だこと…………って、んな訳あるかああああああ！！」

「お、ついにノリツツコミもマスターしたか…ってちよ、マジで斬ろうとしないで！！」

「ふむ…………。助太刀か…………」

騒ぐ二人のもとへ再び舞い戻る落ち武者。

「その少年よりかは手応えがありそうだな…………」

「悪かったな、手応えがなくて」そう呟いて拗ねる仁。

「あら、それは当たり前よ。だって…………」

次の瞬間、落ち武者の身体が上下に分かれ、薄れ始める。いつの間にか懐に入った茜が刀を横薙ぎに振るっていたのだ。

「こいつを鍛えたのは私だもの」彼女が刀を鞘に納めると共に、落ち武者は消滅した。

呆氣にとられる仁。そうなるのも無理はない。自分が全く齒が立たなかった落ち武者が一瞬でやられたのだから。しかもやつつけたのは自分の幼馴染み。これで驚くなど言うほうが無理である。

「ふう……………。で？」戻ってきた茜が訊いてくる。

「いや、『で？』って言われてもなあ……………。お前、一体何者なんだ？」

「……………くっくく……………あはははははは！！そんな直接訊かれるとはね…。OK。全部教えてあげる」

そして、彼女は話し出した。

「まず…、アンタにとって日常って何？」

「に、日常か……………！？むう……………いつもの生活……………かな」

「じゃあ、さっきのは？非日常？」

「そりゃあ……………な」

「うん、それが普通。だから、世界の理はアンタの言う日常から成り立ってる。けど……………」

「例外はつきものってか。さっきの奴はその最たるモンだな？」

「そう。で、その世界の理から外れたもの…いわば澱み…を浄化するの、私たち異端者の仕事」

「異端者って……なんか響きが悪いな……。それじゃあ……」

「私たちもその世界の理から外れてるみたいって？その通りよ」

「な！？」驚く仁。今、こいつは何と言った？自らが世界の理から外れた身であることを肯定した！？

「何、驚いてるのよ？世界の理から外れたものを同じ世界の理から外れたものが相手するのは当然でしょ？……だから、アンタはこれ以上関わらないで。今日見たことも忘れて」

「！？な、何言ってやがる！こんな非日常にお前が身を置いていることを知ったうえで、それを忘れろだど！？ふざけてんじゃね「ふざけてなんかいない……！！」……茜……」

「異端者なんてモンはね……少ないほうがいいのよ……」彼女の声は震えていた。

「それに……私は……アンタに人という枠組みから外れてほしくない……！だから……もう一度だけ言うわ。アンタはこれ以上関わらないで。今日見たことも忘れて……アンタの言う日常の世界へ戻りなさい……」

そう言うと、踵を返す茜。そのとても儂げで寂しげな背中に、仁は何も言うことができなかった……。

世界の理と異端者（後書き）

さて。まずは謝辞を。

本文中のホームレスのくだりですが、武闘鬼さんの第一話の感想から頂きました。

そういう訳で、「こんなキャラ出せ」とか「こんなネタどうだ？」とか思った方、感想で教えてください。善処します。

あと、一話で言い忘れていましたが、タイトルは「瞋恚の炎」と書いて「しんいのほむら」と読めます。

葛藤と決意（前書き）

霧島「第三話、はーじまーるよー!!」

衣笠「…仁が壊れた……!!」

木島「いや、違うぞ、衣笠。これは、漢のロマンだ……!（キラーン）」

神田「いや、意味分からんし」

葛藤と決意

その後、何事もなく数日が過ぎた。

あの日以降、茜とは一言も話していない。ぼんやりと日々を過ごしていく仁。

彼の脳裏に浮かぶのは、あの夜の出来事。

非日常な世界。そして異端者となった幼馴染み。

「忘れろって言われてもなあ……。あんな衝撃的なシーン、忘れようとしても忘れられねえし……」

そう呟いた時だった。

「おうおう、恐ろしい神主さんに襲われた霧島君じゃないか。どうした？」

「……何の用だ、木島あ。」「つかお前が肝試しなんか提案したのがそもそもの発端なんだぞ？」

話しかけるや否や、仁と神田にツッコまれる木島。

ちなみに、仁は二人にあの時のことを、お堂荒らしと間違った神主さんに襲われた、と説明している。

「そ、それはスマンと思っているが……。霧島あ!!」

「な、何だ？」

「俺はお前が何かに悩んでるのが気に入らん!!」

「話を急に变えすぎだ！…だが、それには同感だな。確かに仁、最近元氣ないよ？どうしたんだ？」

「……………」黙り込む仁。

何と説明すべきか悩んでいるのだが、二人には、人には言いにくい何かを悩んでいると思われたようだ。

…それでもあながち間違いいではないが。あんなこと、言いにくいに決まってるし。

「何か話しづらいことがあるみたいだね。話しづらいなら話さなくてもいいけど…」

「けど忘れるな、霧島。俺らは！お前の！味方だああ！！」

誇らしげに言う二人。なんだかんだ言ってもこの二人、仁のことを第一に考えてくれる。

そんな二人を見た仁の口元には笑みが浮かんでいた。

「ふう……、何か吹っ切れた。サンキュな、二人とも」

「ん？俺ら何もやってねえぞ？」「木島…。僕たちの言葉で仁が吹っ切れたことを理解してないの？」

「そうだな……。お前らに一個聞きたいんだが」

「何だ？」「何でも聞いてよ！」

真剣な表情で尋ねてくる二人をみて、苦笑する仁。

「いや、そんな大層な話じゃない。楽に聞いてくれ」

そう言って、彼は尋ねた。

もし、自分の知り合いが危ないことをしていて、それを知ったとして、関わるな・忘れろと言われたらどうするか、と。
それを聞いた二人はあっけらかんと答えた。

「「そんなの決まってるよ（じゃねえか）」」

「へ？」自分がかなり真剣に悩んでいる問いを簡単だと言う二人に驚く仁。

「仁が誰のことを言ってるのかはわからないけど…」

「俺たちから言えるのは“とことん関われ”ってことだけだ」

「仁が悩むってことは、その人ってかなり大切な人なんですよ？だつたら助けてあげなよ」

「お前がその人に対して出来ることってそれぐらいしかねえだろ」

「……………そっか。そうだな……………。何、くよくよと悩んでたんだろ、俺。やることなんて、最初から決まってるじゃねえか」

「おう！」「頑張ってるね、仁。けど、無茶は禁物だよ」

「ああ、任せとけ！！」

彼の進むべき道は決まった。あとはそれを実行に移すのみ。

葛藤と決意（後書き）

しまった！！霧島と衣笠のパーソナルデータを書き忘れてた。

霧島仁 17歳 男

身長…169cm

体重…57kg

ギリギリ170cmに届かない身長に小さなコンプレックスを覚える青年。

衣笠茜の影響で殺気にはかなり敏感で、また、身体能力もかなり高い。

漢のロマンに強く憧れている。

衣笠茜 17歳 女

身長…157cm

体重…45kg

霧島仁の幼馴染みにして、異端者の一人。

異端者として動く時の服装は巫女服十刀。

身体能力は仁を上回る。

最近の悩みは朝の攻撃方法。新しい方法、募集中。

：こんなもんかな。気になることがあったら、いくらでも聞いてください！！

以上、幻妖でした！

非日常「鬼」 (前書き)

木島 「俺たちの出番は？」

しばらくくないね。

神田 「ガッン」

非日常「鬼」

そして、時は過ぎ、午後九時を過ぎたころ。

自室でぼんやりとしていた一人の少女が何かに気付いた。

「……来た……！」

着替えるすぐに家を飛び出す少女。その姿はすぐに闇へと溶けて行った。

そして、その家の脇にある電柱の陰には一人の青年。

彼はその後ろ姿を見ながら呟いた。

「：フツ……氣付かれなかつたようだな……。さて、あとはあいつを
追いかけるだけ……。って速っ！何なんだよ、あのスピード！畜生
！待てや、茜えええええええええ！」

最後の方は半分叫びながら、その青年、霧島仁は自転車に跨り、追跡を開始した。

[illegible]

「……………？ 気のせい…かな、呼ばれたような気がしたんだけど…
ま、いっか」

一瞬立ち止まりかけた茜はそう呟くと再び走り出す。

既に敵は動き出している。立ち止まっている暇はなかった。

[illegible]

「ぜえっ…ぜえっ…こ、ここ…か…」

荒く息をつきながら仁が止まる。彼がいるのは町のはずれにある森。実はこの森、地元の人でも迷うという、かなり厄介な代物である。それでも、仁は自転車を入口に放り出し、森へと駆け込んでいく。

「…どうするかな…下手すりゃ、出会えずに終わっちまうぞ…」

悩む仁。しかも彼、元来た道が分からない。

そんな中、地響きと共に、多くの鳥が飛び立っていく。

「……!?!もう、始まってやがる!!くっそおおお!!」

再び走り出す仁。彼が目的地へと至るのに、そう時間はかからなかった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「…な…こ、これは…!!?!?」

言葉を失う仁。

衣笠茜が対峙していたそれは誰でも知っているものだった。

体長は2メートルを超え、その手には金棒。頭には角が生え、皮膚は赤。

そう、まさに伝承通りの鬼がそこにいた。

「「……………」」

対峙する茜と鬼。両者ともに一言も声を発さずに隙を窺い合う。

しばらくして、その均衡が破られる。先に動いたのは……鬼。金棒が茜めがけて振り下ろされる。それを跳躍して避けると、茜は腰の刀に手をかけた。

「…衣笠一刀流…」
「…斬翔…」
「…！！」

刀が振るわれると共に斬撃が飛び、鬼に襲い掛かる。

次の瞬間、驚愕する茜。彼女の目に映ったのは、自分の元へ突っ込んでくる鬼の姿だった。

自らの身体から鮮血が舞うが、そんなこと何でもないかのように突っ込み続ける鬼。

! !

雄叫びを上げながら、その剛腕で茜を地に叩きつける。

「かつ……は……」

肺の中の空気が押し出され、動けなくなる茜。そんな茜に向けて、鬼が金棒を振り上げる。

その姿を見た瞬間、仁は走り出していた。

非日常「鬼」(後書き)

あれ、おかしいな。

鬼とのバトルなんて一話で終わらせるはずだったのに…。
ま、いつか。

あ、あと、茜の「斬翔」は、ONE PIECEのゾロの三十六煩
悩鳳のイメージで。

では。

霧島「感想、待ってるぜ!!」

衣笠「我らがアホの作者が喜ぶので是非!感想を書いてください!
」

アホってゆーな…(泣)

相棒（前書き）

…皆さんって、一話あたり何文字くらい書いてるんだろ…。
俺の場合は一話あたり平均して1000文字＋αなんだが…。
どなたか、感想で教えてくれませんか、一話あたりの平均文字数。

相棒

衣笠茜は動けない中、自分に向けて振り上げられる金棒をぼんやりと眺めていた。

（あ…私、死んだかな……。こんなことなら…あいつとちゃんと話をしとけばよかったな…）

そう思い、目を閉じる茜。そして、彼女に向けて金棒が振り下ろされた。

目を閉じた茜が感じたのは、誰かに抱え込まれる感触、ザアアアッという地を滑る音、そして、少し離れた所に鈍器のようなものが振り下ろされる音だった。

目を開ける茜。そこにいた一人の青年。彼の名を彼女は知っていた。

「……じ…仁……!!??」

「おう、来たぜ。これで前の借りは返したな」軽く笑いながら言う仁に茜がキレた。

「『来たぜ』じゃないわよ!! 私、言ったわよね、これ以上関わるなって! あんたが非日常こっちの世界に来るのが私には耐えられないからって!!」

「ああ、言っただ。けどな……」そこで言葉を切る仁。

「お前を見捨ててまで日常あっちの世界にいられるほど、俺は人間が出来てねえんだよ!!」

そう言い切った仁を見て、嘆息する茜。

彼女は知っている。彼はここまで言ったら、絶対に退かないということ。

だから、彼女はこう答えた。

「…………もう、分かったわ。…ようこそ、非日常へ、仁！」

その答えを聞き、満足そうに笑う仁。

「おう！！さくて、鬼！非日常お前のその魂、殿み俺たちが滅し尽くす！！行くぜ、茜！！」

「ええ！！」

彼らはもう負ける気などしない。隣には頼もしい相棒パートナーがいるのだから！！

「うおおおおおお！！」

雄叫びを上げて走り出す二人。残念なのは、走っている方向は鬼がいる方向とは逆なところか。

一瞬呆気にとられた鬼が追いかけ始めた。

走りながら、打ち合わせをする二人。

「いい！！あんたはまだ、異端者としての能力を開放してない！まずそれを開放する！！」

「おう！で、俺は何をすればいい？」

「…………能力解放には2つの方法があるわ。1つ。非日常に対する急

激な敵対心を引き金に能力を開放する方法。基本的な異端者はこちらの方法でなってることが多いわね」

「無理だな！今更、急激な敵対心なぞ抱けるか！！はい、2つ目！」

「2つ目！！この…（ごそごそ…）…この祝詞を一ヶ所に留まって、15分間かけて読み上げる！！ただ、これ…生命力をかなり吸われるのよね…」

「おっし、それだ！！」

「決断早っ！！…あんた、分かってる？生命力吸われんのよ！？寿命も縮まるし…下手すりゃここで死ぬわよ！？」

「決断するも何も…他に方法ねえじゃん。それに、俺は死なねえよ、天下の霧島仁様だぞ！？」

「天下って……分かった！じゃ、これ。時間稼ぎは任せなさい！…あ、祝詞はちゃんと15分かけて読みなさいよ、それより早いと生命力吸われ尽くされるから！！」

「おう！頼んだぜ、相棒^茜！！」

そして、少女はその場に留まる。相棒^仁を信じ、時間稼ぎをするために！！

（祝詞読むのに15分。戻ってくるまでには…大体25分…かな…きつついなあ…ってあれ？あいつがここに来たのって、私を助けるためじゃなかったっけ…）

完璧な本末転倒であった。

相棒（後書き）

おかしい…なぜこうなった…。
鬼がまだ倒れないとは…。

仁「やっぱりこの作者駄目だ。計画性ってもんが…」

うるさい！！次の話では終わらせたいな…。

あ、感想待ってます。

覚醒と宣告（前書き）

少しずつですが、お気に入り登録して下さっている人が増えています。

こちらとしてはありがたい限りです。

これからも応援よろしくお願いします。

霧島「6話目です話じゃねえよな、それ」

：気にするな。思いついたら、やらずにはいられなかったんだ。
では、お楽しみください。

あと、すいません、霧島仁は左利きです。

小説中で少し、この設定が生きてくるので…。

覚醒と宣告

森の中に金属音が響き渡り、空気が振動する。それを肌で感じながら、仁は座り込んだ。

「さうて、始めますか……。待ってろよ、茜。すぐに終わらせてやるからな……。『我、自らの身を異端者へと……』」

祝詞を読み始める仁。彼が異端者になるまで、あと15分。

||

「斬翔！」

走りながら茜が刀を振るい、斬撃が舞う。

しかし、それで鬼に傷をつけることは出来ても、歩みを止める事は出来ない。

しかも、しばらくすると傷も塞がってしまう始末。

「……！」

鬼が吼え、金棒を振るってくる。それを体をかがめてすれすれで避ける茜。

「も～～～～！！何なのよ、全く！！仁、急いでえええええ！！」

半泣きの状態で走りながら茜が叫ぶ。

しかし、この場面、仁が祝詞を読み始めてから5分も経ってない時のこと。

茜はこれからしばらくの間、何度も死ぬような目に遭うのだが、そ

こは割愛しよう。

彼女がかわいそうだ。

そんな二人をじっと見つめる男がいた。

とはいえ、彼はその場にいない。彼の持ち駒の中にはそういうことに長けているものもいるのだ。

「おお！？遂にあの兄ちゃんも異端者入りか……。少しの間とはいえ、人の身でこの前の落ち武者と生身で闘り合ってたのには驚いたが……。まさか異端者になるたあねえ……。こりゃあ面白いことになりそうだ……。俺の出番は、俺が送った刺客^鬼を倒せたらの話だが……。まあいつらなら倒せるだろ。……。くひひひ、行くぞ、ジャック。これから忙しくなるぜえ……」

《Yes, master.》

そう呟くと、その男は何ヶ所か焦げている白衣を翻し、ジャックと呼ばれたそれと共に闇の中へと消えて行った……。

「……あうっ！！」

木の根に躓^{つまず}き、茜が倒れこむ。既に彼女の身体は傷だらけだった。繁^{しげ}みを抜けたのか、服のあちこちは敗れ、薄く血が滲^{にじ}んでいるところも少なくない。

「……まだかな……。仁……。私、もう限界なんだけど……」

そう呟く彼女にもう立ち上がる気力は残されていない。

仁が現れる直前の、鬼に見下ろされる構図が再現される。

しかし、鬼が金棒を振り上げようとした瞬間、鬼の身体に何かがぶつかった。

それはぶつかった瞬間に爆発し、鬼を呑みこむ。煙が晴れたとき、そこにはなにも残されていなかった。

「遅いよ……じ……ん………！？こ、これって………！！」

一瞬喜びかけた茜だったが、その顔には驚愕がありありと表れていた。

「……ん？どうかしたか、茜？これが俺の能力^{チカラ}だけど…」

彼の両の拳には炎が纏われていた。そして、その背には紅蓮の翼が生えている。

左手は前に突き出され、薄く煙が立ち昇っていた。恐らく、炎が放たれた名残だろう。

しかし、彼女の表情は晴れない。ゆっくりと立ち上がり、こう言った。

「仁！！今^{チカラ}すぐにその能力^{チカラ}を封印するわ。その能力^{チカラ}は…危険すぎる…！！」

覚醒と宣告（後書き）

途中に出てきたあの男。キャラ設定的には自分のお気に入りです。再登場をお楽しみに！！

ってか、犯人あいつだったのかwww

さて：PVアクセス数が既に1000を突破しました。

正確には、投稿する時点で143。

そして、ユニークアクセス数は51。

一話投稿から今日で一週間。

これも皆様の応援のおかげ。

前書きにも書きましたが、これから応援お願いします！

：感想も待ってます。

今まで、感想書いたことのない人でも全然OK！

幻妖は、感想をくれた人の小説は必ず読んで、必ず感想を書きます。

：多分。

獄炎（前書き）

はい、今回はほぼ、説明回です。
そして、初挑戦のキャラ視点。
では、お楽しみください。

獄炎

<仁視点>

小鳥のさえずりが聞こえる。…朝か…。

目を開けると、見覚えのない部屋に一瞬混乱するが、横で眠っている茜をいつを見て納得する。

そうか、こいつの家か。

……あれ？なんか引つかかる……。何が引つかかっているんだ？？
……茜を見て、なんか感じた……。茜：横で眠ってる……。横で眠ってる
！？

次の瞬間、俺は布団から飛び出し、叫んでいた。

「茜ええええええ！何で隣で寝てやがるううううう！！？？」

俺の叫び声に目を覚ました茜が不機嫌そうに言葉を紡ぐ。

「：何でって：あんたをここまで運んで：そこで私も力尽きて：で今に至ると」

確かにこいつの服は昨日の服のままだった。

その中で俺の目に留まったのは、服の焦げ跡、そして、包帯の端から見え隠れする生々しい火傷の跡。

…これは昨日俺がやったものだ。

「…思い出したみたいね、昨日のこと」

茜が静かに言う。

ああ、思い出したさ。何があったか、はつきりと。

それは俺が鬼を一瞬で消し飛ばした、あのシーンまで遡る……。

俺が鬼を吹き飛ばしたのを見て、茜が立ち上がる。

もう、危険はない：筈だ。鬼は間違いなく、俺が消滅させたのだから。

なのに：彼女の表情は冴えない。まだ、危機は去っていないというかのように。

そして、彼女が次に言った台詞に俺は困惑した。

いきなり、手に入れた能力を封印すると言われたのだから。

それが非日常と戦う術を失うことに他ならないことを彼女は知っている筈だ。だから、間違ってもそんなことを言う筈はないのだが：。そんな俺の心を読んだかのように、茜が話し始める。

「あんたにはまだ言っていなかったけど：異端者と非日常にはランクがあるのよ」

茜によると、どちらもS、A～Fの7つのランクに分かれているそうだ。

先日の落ち武者はEランク、さっきの鬼はBランク。

そして、あいつはCランク：らしい。あんなに強いのに。そう言ったところ、

「：私、あんたにまだ能力ほとんど見せてないわよ。：そもそも私の能力、退魔じゃないし。退魔の力は異端者には基本備わってるものなの。非日常って、ほとんど例外なく人外だから」

なるほど：。俺の能力は何ランクか、と尋ねると、茜が言うのを躊躇う。

しばらくして、ようやく茜は口を開いた。

「：鬼を一撃で葬り去るほどの炎、背から生える炎の翼：。正式な

名称は分からないけど…間違はなく、あんたのその能力はSランク…!!」

ますます分からない…。何で、Sランクなんていう強力な手駒をわざわざ封印するのか。

こいつにとったら、役に立つ筈なのに…。

「…だからこそなのよ…。Sランクの存在は世界には大きすぎる。だから、早く封印しないと…世界が…崩壊する…!」

世界が…崩壊する…!?! “霧島仁”というたった一人の存在によって…!?! そんなことが…起こりうるのか…!?!

にわかには信じ難いことだったが、…俺は既に異端者の身。どんなことがあっても不思議なことはない…!!

なら…!!!!

「分かった。茜…封印しろ」

「…物わかりがいいのね。あんたのことだからもつと渋ると思ってたけど…」

最近、俺の扱いが酷いような気がするのは気のせいだろうか…。

俺ってそんなに物わかりが悪そうに見えるか…?

まあいい。急がねえと…。世界を崩壊させるわけには…いかない…!

「茜…さっさと頼む」

「分かった」

そう言うと、茜は包帯を取り出した。何でも、能力を抑え込むため

そう尋ねたところ、別にいいんじゃない、と返ってきた。大雑把だな、おい。

：とまあ、そんなこんなで今しばらく俺は異端者として生きていくことになったのだった。

この時の俺は：暢気だった。これから起こることも知らずに。

獄炎（後書き）

では、仁の能力説明。

名称…???（便宜上、今は「獄炎」）

ランク…S（今はB）

説明…炎を操る能力です。イメージとしては禁書の^{パイロキネシスト}発火能力をイメージしてくれたら分かりやすいかと。

分からないことがあったら、ドンドン聞いてください。
感想も待ってます。

非日常「浮遊霊」(前書き)

投稿が遅れてすみません。

ネタが思いつくのに関時間がかったってのもありますが、それ以外にもちよつとあつたんですよ…。

簡単な話は活動報告の方に載せてはいるので…。

では、お楽しみ下さい。今までの中では一番の出来だと思っています。

非日常「浮遊霊」

既に俺が異端者となって一週間近くが経過した。その間、俺の非日常との接触回数は0。いいのか悪いのか…。

さて、そんなある日のことだった。

放課後、帰ろうとした俺を茜が引き留めた。曰く、何やら大事な用があるらしい。

人目を憚^{はば}っていたから、恐らく非日常^{あの事}絡みなんだろう…。

という訳で今、俺たちは図書館にいる。理由は簡単だ。

ここには、生徒が自由に使えるパソコン（ネット完備、ここ重要）が設置されているのだ。

そのパソコンの内の一台の前に陣取ると、茜が何やらネットで検索を始めた。

……俺、いる意味あんのかね…？

「あるわよ。今から非日常^{あいつら}潰しに行くんだから」

…はい？ んで、何でパソコンなぞしてんだよ。

そう尋ねたところ、霊の目撃サイトで情報を集めているのだ、と言われた。

あいつによると、巷で噂されることの多い、いわゆる“霊”というやつもれっきとした非日常の一つなのだそうだ。

ランクとしては、最低であるFランクが殆どとはいえ、放っておくと少しずつだが世界が歪んでいくらしく、結構頻繁に祓われないといけないらしい。

そういう訳で、今あいつはこうして情報を集めている。…俺は暇で暇でしようがないけれど。

時折、手元のメモに何か走り書きしているあいつを見ると、稀に非日常のことなど忘れてしまいそうになる。

こんな感じで普通に生きていけていければいい…そう思ったことも、やはりある。

しかし、本当に忘れることはない。俺は、こいつが日常あっちに帰るまでは忘れないと誓っているから。

…そんなことを考えている内に、調べ物が終わったらしい。茜が席を立った。

「仁、行くわよ。目的地は3丁目の交差点!」

さて、んじや行きますか……。

|||||

…で、目的地には着いたのだが…特に誰も暴れてねえぞ…? まあ、もう午後5時だし、少し人が減ったような気はするが…。

「何言ってるのよ、非日常ならあそこにいるじゃない」

そう言って指差す茜。その指の指すほうを見ても…小さな女の子しかいない……ってまさか……。

あの女の子が非日常だって言うのか…!?

「何驚いてんのよ。…確かにあんたは人を襲うタイプの非日常にか遭遇したことがないけど、非日常っていうのは私たちが生きるこの世界と相容れない存在のこと。それに人への敵意があるかないかなんて関係ないわ。つまり、あの子もれっきとした非日常ってこと」

そう…だったな……さっき図書館で聞いたばかりじゃねえか…非日常ってのは存在するだけで世界を歪ませるって。なら……俺はあの子を滅けさないといけないのか…この炎で…?

そんなことを考えていると、それが俺の表情に表れていたのだろう、茜が口を開いた。

「大丈夫よ、仁。非日常の祓い方にも色々あるの」

そう言って、歩き出す。向かう先にいるのは、例の女の子。

本当に大丈夫なのか？？学校の帰りに直接来てるから、あいつ制服だし、刀も持っていないのに？。

そして、その子の元へ着くとしゃがみこんでその子と話し始めた。

：周りの人の茜を見る目がちよつと変だが：当たり前か。霊なんか見えないほうが普通だもんな。

しばらくして、茜が戻ってきた。

「よし、それじゃ探すわよ。あの子の犬。名前はラッキー」

………はい？

|||||

さて、茜によると、非日常の祓い方には大きく分けて二つの方法があるのだそうだ。

一つ目は、俺が今まで見てきたように力押しするやり方。

二つ目は、相手の心残りを精算させて平和的に事を収めるやり方。

：という訳で今、俺たちはあの子の心残りである迷子の犬を探している。

ただなあ：この町って結構広いんだぞ！！探すって言っても限度があるわ！！

既に午後7時半。とはいえ、こういうことに慣れている茜のおかげで残るはここ、6丁目だけだ。

二手に分かれて犬を探す俺達。例の女の子は俺についてきている。

「ラッキー……！！どこ……！！」

「ラッキー、どこだあ……」

少女と俺の声が夕焼けの名残を残す夜空に響く。

しかし、ラッキーは現れない。

そんなこんなで歩いていると、茜と合流してしまった。時刻も8時に差し掛かっている。

…これ以上は無理じゃないか…？そう俺が思ってしまったその時だった。

ワン！…犬の鳴き声が響いた。顔を上げる俺達3人。辺りを見回してみると…暗闇から犬が飛び出してきた。

「ぬおっ!？」

…俺のセリフだ。はい、犬に押し倒されました。

しかしそんなことどうでもいい事かのように、少女へと駆けて行く犬。そして踏みつけられる俺。

「ラッキー!!よかった…本当に…よかった…」

そう言う少女の顔は涙で濡れていた。ひとしきりラッキーとの再会を喜んだ後、少女は俺たちの方を向いた。

「お兄さん、お姉さん、ありがとうございます。やっとラッキーに会えました…やっと…」

そう言うのと再び泣き出す少女。本当に嬉しかったんだな、ラッキーに会えて。なら俺の言うべき言葉は…

「気にするな、俺はお前に感謝されるためにこんなことをやったんじゃないねえ。お前を喜ばせるためにやったんだから…よかったな、ラッキーに会えて」

…心なしか、茜の表情がにやけてるのが気になるが、まあいい。後で話はつけよう。

その言葉を聞き、はにかむように笑うと、少女の姿が薄れ始めた。そして、

「ありがとう」

そう言って、その姿は…消えた。…犬と共に。

そうか…お前も…あの子と一緒にだったんだな…。共にお互いを求め、彷徨っていたのか…。

そう思いながら空を見ていると、しばらくしてから茜が口を開いた。

「どうだった？ 非日常の祓い方にも色々あるでしょ？」

…そうだな。だが、俺には…………

「あの子が非日常だとは思えなかった…でしょ？…ま、いいんじゃない、それでも。それがアンタの優しさなんだから。私はそれを悪いことだとは思わないわよ。…じゃ、帰りましょ。明日も忙しいわよ」

空に浮かぶ月が帰路につく俺達を優しく照らしていた。

非日常「浮遊霊」(後書き)

仁「疲れた」

はい、お疲れさん。幻妖も疲れたよ。

茜「マラソン大会でしたね、学校の」

ええ、校内順位は低くても疲れるものは疲れるんです。
という訳で：アデュー！

仁「感想も待ってまー！ーす！！」

神田と弓道場（前書き）

さて、活動報告にも書きましたが、ここにも一応。仁は能力を抑えられた際に、左腕に包帯が巻かれ、それはいまでもそのままだす。

彼が包帯を外すとき。：それは彼が自らの世界を捨てるとき。

ま、今回には関係のないことですがね。

では、第9話をお楽しみください。

神田と弓道場

屋上に男たちの笑い声が響く。

今は昼休み。生徒たちが三々五々集まって仲良く飯を食べる時間。その例に漏れず、仁は木島・神田と共に弁当を突つつきあっているのだ、屋上で。

「あははははは！！そりゃあ最高だ！」 「だろー！！」 「あははははははは！！」

しかし、響く声は二人分。神田が会話に入ってこないのだ。思いつめた表情で何も話さず、箸も進んでいない。

「……………神田 あ、どうしたんだよ、一体。思いつめた表情しやがって」

笑うのを止め、神田に問う仁。しかし神田は答えない。

というより、仁の言葉すら耳に入っていないようだ。その証拠に、仁が肩を揺さぶって初めて、自分に話の矛先が向いていることに気づいていた。

「…へ？あ、ああ…僕に聞いてたの？ゴメンゴメン、ちょっと気になることがあって……」

それだけ言うと再び黙り込む神田。そんな彼の姿を見て、仁の相貌が険しくなる。

そして無言で神田にデコピンした。ビスッ！と軽快な音が響く。…
どんだけ威力あんだよ…。

「あう！！??」悶絶する神田。そんな神田に仁は話しかけた。

「神田：お前が何に悩んでいるのかは知らん！だがな、お前が教えてくれたんだ！人に相談することの大切さを！あの時の俺はお前たちのおかげで吹っ切れることができた！今度は俺がお前を助ける番だ！！だから：話せ：！！」

彼は身を以て知^もっている。一人で抱え込むことの大変さを。

だからこそ、自分にそれを教えてくれた張本人である神田がかつての自分と同じ行動をとっているのが許せなかったのだ。

神田は仁の顔をしばらく見つめていたが、やがてにっこりと笑った。

「：そうだったね。僕たちが仁に教えたことを、逆に仁から諭されるとはね：そんなに大した話じゃないから黙ってたんだけど：まあいいや、じゃ、話すよ」

実は神田は弓道部に所属している。その腕前は部の中でもトップで、高2で部長を務めるほどだ。

さて、そんなある日のことだった。弓道部に所属している女子生徒が急に退部を申し出てきたのだ。

弓道部の練習は他の部と比べても確かにきつい方だ。だから神田も仕方ないと思い許可したのだが：。

しばらくすると、続々と退部希望者が現れ始めたのだ。

流石に異常だと思い、事情を聞いてみたところ：…全員が口をそろえてこう言ったのだ。

「弓道場に幽霊が出る」と。

半信半疑の神田だったが、皆が真剣な表情で同じことを言うので、遂に弓道場で張り込んでみたらしい。

そして、彼は聞いたのだ。誰もいない筈の弓道場から響いてくる、

弓の弦が鳴る音を。

そして、彼は見たのだ。誰もいない筈の弓道場に立つ一人の男の姿を。

「……それ、本当か……？」

木島の声が心なしか震えている。

神田が嘘をつくような人間ではないことは彼らが一番よく知っている。

だからこそ木島は、垣間見えてしまった自分の知らない世界の片鱗に恐怖したのだ。

しかし、仁は違う。彼は既に異端者の身。

二人にとつての非日常は彼にとつての日常なのだ。恐れることなど何もない。

「大丈夫さ、すぐにいなくなる。安心しとけ、神田。………お、もうすぐ授業始まんぞ、急げよ」

そう言って立ち上がると出入り口へと歩いていく仁。

そんな彼の後ろ姿を神田は複雑な表情で見つめていたのだった。

||

そして、その夜。人気の全くない校門の前に二つの人影があった。言わずとも分かるだろう、仁と茜だ。

「まさか、学校にまでいたとはね……」

「全く……お前ならこれぐらい知ってると思ってたのによ……」

小声で憎まれ口を叩きながら門を乗り越え、弓道場へと向かう二人。

そして、二人は見た。静かに瞑想している一人の男を。

その後ろ姿からはどっしりとした覇気が感じられ、並みの者ではないことを窺わせる。

その威圧感に思わず息を呑む二人。そんな二人に対し、男は口を開いた。

「……………ふむ、先日までの者とはまた違った雰囲気を持っておるな…。…異端者…か？」

「……………ああ、その通りさ。…………さて、アンタが未だ^{まよ}み続ける、その理由ってモンを教えてくださいませんか。本音を言わせてもらおうと、俺はアンタとは闘いたくないからな…」

異端者であることを一目で見抜かれたことに少なからず驚く仁だったが、まずは祓うことが先決である。そのまま本題へと入っていく。その質問を受けしばらく黙った後、男は答えた。

その答えを聞き、拍子抜けする二人。

男が^{まよって}澱んでいた理由、それは…

「はあ……………腕……………試し……………ねえ……………茜え、そんなのって…あるのか…？」

あまりにも平凡な理由に複雑な表情をする仁。恐らく彼と同じく奇妙に思う人も多いだろう。しかし、

「澱む《まよう》理由なんて人それぞれなのよ」

「……………そんなもんなのか……………けど、どうすんだ、茜？俺たち、どっちも弓なんぞ出来ね、」

「……仁？そこで……いったい何を……？」

突如として聞こえてきたその声に仁の表情が一気に凍りつく。
その声は彼にとって、とても馴染み深いものだったから。

「……か、神田……！！！？？」

仁がその名を呼ぶ。これが夢であってほしい、……そう願いながら。
しかし、彼のその儚い願いはすぐに打ち砕かれた。

弓道場の影から現れた、その人物は……はたして神田だったのだ。
神田はそんな仁をしっかりと見据え、言った。

「仁……全て……話してもらおうよ」

t o b e c o n t i n u e d

神田と弓道場（後書き）

何か、どんどん投稿ペースが遅れていく…。

何故なんだああああああ！！

…なんか話すことねえかな…って思ったんですが、特に何もなし
w w

という訳で、感想待ってまーす！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1864y/>

瞋恚の炎

2011年11月23日15時49分発行